

# アイノの人類學的調査の思ひ出

—四十八年前の思ひ出—

小金井良精

明治二十一年の夏北海道に旅行した。

その目的は一はアイノ人種生體に就て計測觀察し、一は成るべく多數の頭骨、骨髄を蒐集するためであつた。七月五日東京出發、八日函館に、十一日小樽に着いた。先づ小樽病院院長桂彦馬氏及び元札幌病院院長馬島護氏に計る、川上正貫なる人を推薦せらる。この人元探察科など勤めたことがあると、當時は湯屋を営み傍に小さき店あり、これに小數のアイノ器物もあるけれども主なる陳列品は石器時代のもので石器、土器の類澤山あり、中には可なり珍らしいものもあつた、これは大抵余市にて發掘せるもの。完全なる土器の中に甚だ疑はしく偽物らしいものも

あつた。その頃これ等の品物はただに學術上の資料としてのみならず、これを愛玩する人々があつて一種の商品として賣買された、また一面には方々の石時代遺跡が殊に余市に於ては盛に發掘された。或る會社の支店長某氏の如きは熱心なる蒐集家であつて、特に陳列館を設けてその内容の豊富なるを誇とされてゐた、併し土器中には怪しいものも見受けた。氏の藏品中アイノ頭骨が一箇ある、私の懇望により快く贈與せられた。これは本旅行に當つて最初の收穫にして幸先よしといふて感謝した。

ある、二三年前は盛んに取り引きされて内地へも遠く横濱、神戸あたりまで運ばれたので従つてこの邊に於ても偽物が澤山出來た自分はその事情をよく知つてゐる、今は全く衰微して偽物を造る人もないから差支ないと秘事を明かした。余市黒川村の渡邊某なる者が重に造つた、始めは實に拙かつたが種々工風して土質を似せるために土器の破片を澤山集めてこれを粉末にし、それを捏ねて造つたから雲母、砂の混り工合など宜しく、これを屋敷の隅に設けた小さな寮にて焼いた、随分上手なものが出来た云々。或日横濱の考古學者英國人ドクトル、マンロオ氏の許にて何所で出來たものかは知らないが土器、土偶の偽物を柳行李に一ぱい見たことがある、かかる偽物が國外へも若干出でゐるであらう。またその頃異體文字、古代文字など、稱せられた文字様のもの、アイノ器物、河原石などに書かれたのを見

た(人類學雜誌明治二十年頃)、これは全く詐偽であつた、手宮の所謂古代文字の評判からでも思ひ付たものか。餘談はさておきかんじんなアイノ骨髄に就ては川上氏が人夫其他萬事心得て引き受けて呉れた。

十二日、木、曇晴。小樽アイノは二十年程前までに悉く高島、忍路等へ立ち退き其後は全く居ない。されば今ある墓は何れもそれ以前のものである。總て發掘に就ては始めから、アイノがまだ附近に居る様ところは避けて、成るべく古い無縁の墓場を探し求めるのが最も大切である。と考へてゐた。小樽の墓場は町の西南方、山の中腹で藪である、小樽市街設計圖によれば住の江町七丁目に當ると、入船町と相生町との間の地も墓場であつたが今は人家が建ち並んでゐると。埋めてあるところは斜面に段があつて丸石が二、三箇置いてあるから直にわかる、墓標のまだ残つてゐるのが二本あつた。十箇所

許發掘した。

十三日、金、晴。前日に引き續き發掘、完全なるもの六箇、稍不完全なるもの及び小兒數箇。深さ一、二尺にして甚だ淺い、手安く骨に達する、中には土が流れて骨が表面に見えるものもあつた。仰臥伸展、粗末な木の棺に容れたもの、またキナ(禾本科植物で編んだ蓆)にくるんでそのまゝ埋めたものもあつた。キナ、アツシ(オヒヨウの靱皮絲で織つた衣服)がまだ残つてそれと認め得るのがあつた。種々な副葬品がある、椀、鎌、マキリ、刀、鐔、耳輪、鉄等。珍らしく感じたのは頭骨の中に腦髓が白く恰もひめ糊のやうになつて残つてゐたものがあつた。他の軟部は悉く消失して最後まで腦髓が残つてゐることがあるといふことを證明する、かかる實檢はそう屢出來るものではないと思ふ。發掘はこれにて終りとして、病院を借りて荷造りした、石油箱十一箇となつた、始めにこの大なる收穫は實に

喜ばしかつた。

十四日、土、晴。余市に向つて發す。當時北海道旅行は總て馬を以つてするが、馬方も馬追ひと稱してやはり馬に乗つて、内地の駄馬乗りとは違つて駈けて行く。私は極めて慣れないからして特におとなしい馬を注文した、ところがおとなしい馬は即ち弱い馬で、足が甚だ遅いので綱を以て馬道の馬の鞍に繋いで引張つて行つた、ところが自分の馬が前足を屈して轉んだために落馬した、腰をしたたか打ちたるも續くことが出來た。十二時半余市川村着。

この邊アイノ小屋數軒ある、宇生島吉なる者を訪ねた、家族は夫婦と子供四人、アイノは皆邦名の外にアイノ名を有する、これはイキシマクロといふ、その意味はイはおまへ(汝)キシマは掴むクロは人即ち人を掴む人といふ意味。島吉夫妻其

他を計測す。初めてのことに何事も珍らしく日暮れるまで話して居た。宿に歸

る、

つて夕食し、再び出て十丁許隔たりたる黒川村に川上氏の紹介を以て渡邊某（前にいふた偽物を巧みに拵へた人）を訪れて發掘のことを頼んだところ、案内大呑込みに手安く承諾してくれた。野原の暗い道を幽かな月明かりを手よりに十一時宿に歸つた間もなく某今掘つたといふて頭骨のみ二箇持つて来た、外の部分は如何したといへば、そんな暇はなかつたと、氣の早い人である、尙ほ明日を約して去る。また宿の主人尾張某は至つて物好きでな人で大に斡旋す、懇意なる田村某氏の屋敷内に墓數箇あるからといふて話をし

て呉れたところ田村氏は快く承諾した。十五日、日、晴。尾張氏の案内にて田村氏屋敷に到り掘り始め、中にはまだ立派な墓標の建つてゐるものもある、先端二又になつて彫刻ある丸太、これは男。ただ氣にかかることは遙か向ふにアイノ小屋が二、三軒見えるから、なるべく見附けられないやうにとひ合せた。夕刻まで

に五體掘り揚げた、ところへたうどうアイノが五、六人やつて来た、これは困つたと心配した、兎に角地主田村氏が應對し、屋敷内に墓があるのは誠に嫌だから、これを取り除くのだといひ、それから急に板を持つて来て祭段を拵へ、酒と菓子と花を供へて皆々禮拜して事済となつた、中に一人のバツコ（老婆）が居てナムアマダブツ、ナムアマダブツといふて泣いてゐたのは弱つた。まだ在る様に思はれたけれども發掘は中止した。外に渡邊發掘せるものを數箇持ち来る。合計十二箇許、石油箱六箇に詰めた、一時就眠。

十六日、月、曇晴。出發、馬四頭、野には是所彼所アイノが仕事してゐる、この方を頻りに眺めてゐる、馬背の石油箱は骨だと知りせぬかなぞ思ひつゝ小樽歸着。

十七日、火、晴。札幌着。道廳訪問。永山長官に挨拶、村尾元長、永田方正、

石田良助氏に面會、この三氏は皆アイノに關して造詣深い人々である。病院に到る、院長獨逸人ドクトル、グリーンム氏に挨拶、副院長屋代善夫、撫養圓太郎、朝倉文三氏は自分の友なれば久し振りに會ひたるを歡ぶ。

を借用した。

二十日、金、晴。道廳に頭骨二箇ある、その借用手續きをなす。苗穂監獄にアイノ囚五人（中一名女）ある、行きてこれを計測した。足立元太郎氏所有の頭骨一箇借用。

二十二日、日、晴。對雁行（札幌より四里半）、此所は千島交換の結果カラフトアイノ八四一人移したところで、これを調査する目的であつた。然るに今は皆ライサツ（石狩川口）の方へ出稼して残つてゐるものは極めて少數の婦女小供で甚だ失望した。歸路江別へ廻つた。ここに小佛寺があつて、後の小山はカラフトアイノの墓地である、墓の數はなか／＼多い。

二十三日、月、晴。札幌在住アイノを集めて七人計測した。アイノ一人計測と記載とをなすに二十分乃至三十分を要する、その幅として遣るために手拭、煙草、指輪など若干用意して置いたのが間もなく盡きた、後は男女の別なく十錢づゝ與へることにした。また時にはアイノは病氣殊に痲瘡にかかると皆死んでしまふが、シヤモ（和人）は助かる、それでアイノの身體をよく調べてアイノも助かるやうにしたい、そのため自分はわざ／＼東京から来たのだといふ辭を用ひたこともあつた、何時もヤイライギレ（有り難い）といふ挨拶であつた。

二十一日、土、晴。豊平橋を渡つて先きにアイノの飲食店を營んでゐるのがある、行きて四人計測した。酒を振舞つたところが大悦び、隣から若い十七、八のアイノの娘二人、バツコなども来て大陽氣となり、歌ふやら踊るやら種々な藝を見せた、何れも皆無遠慮なものであるが、中に目立つて放逸なるチャリサングといふものと、その妻と稱するものの鼻尖が同様に缺失してゐる、甚だ珍奇に思つて質して見た、これは人のメノコと通じて切り落されたのだと答へた（尙ほこのことは後にいふ）。ここはアイノの魔窟であるかのやうな感を以て去つた。晩は當地醫學會に於てアイノ人種調査に就て講演し

かに勝つてゐる、二、三の酋長格のものかと思はれるのは蓋が屋根形で、地上に現はれてゐる、その彫刻は實に見事である、これがためには數十日を費すと、蓋を擧げると内容が見える。實の山に入りながら空しく去つた。夕刻札幌歸着。

二十四日、火、曇。札幌發。千歲着。アイノ小屋五十三四箇あると、但し方々に散在する、マサトクルといふアイノを訪れて夫婦を計測した。この邊は寒い季節（三月頃まで）に夥しく鶯の集るところで、それは千歲川を上つて散卵する蛙をあさるのであると、アイノはこれを描

るのを一つの重要な業としてゐる。本年は六百羽も獲たといふ。近頃は鐵砲も用ふるが、アイノの仕来りの方法が面白い、穴を掘つてその中に這入り雪で覆つて待つてゐる、鷹が來ると鉤で引つかけるのであると、鷹の爪を三、四箇貰つた。

二十五日、水、曇晴。ポオタラクルといふアイノ方に到り三名、シバロセツテ方に到り二名計測、ヌサ(神籬)にかざつてある熊頭骨二箇得た。途上にてコンバといふアイノに行き逢つた、これは盲目の老人、醫者ともいふべきもので今病人に招かれて行くのであると、何々草の根又は木の皮を煎じて飲めなどいふさうだ。ポオタラクルの庭にキナ筵の上に眞白な綺麗な粉が乾してある、これは姥百合(訛つてツバヨロ、アイノ名ツレツ)の根から製した澱粉である、その粕も捨てずに圓板の形にして乾してある。その採集はメノコの仕事で、アイノの重要な食物の一つである、見本として一掴み貰

らつた、歸京の後真湯にして試みた、篩にかけないからして纖維が澤山あつた。二十六日、木、曇霧。千歳發、落馬した、左手に擦過傷を受けた、一週間許して直つた。苦小牧着、シランカオクの小屋を訪れた、家主生憎少し病氣、併し種々な話をした、男女四名計測。

二十七日、金、曇霧。苦小牧までは開拓使によつて開設せられた國道なるも、今日からは眞に北海道らしき道となる。勇拂にて馬を繼ぐ、厚真といふ川あり、馬上にて越す。携へたる握りめしを食ふ。多くは海岸汀の砂上を走る。玫瑰の花見事。鷓川着。アオレッテ外一名計測。

旅行一般に就て一言する。道は海岸汀を行くか又は折々丘上にする、丘には雜草の他、特に著しいのは玫瑰、虎杖、蔞が生え繁つてゐる。今は玫瑰の花盛りで誠に綺麗であるが、これには強い棘があつて、ツボンを擦り切るからして脚絆又は長靴が必要である、私は後者を用ひた。

虎杖の大きいのは驚いた、馬上尙ほ頭を没する、藪の葉の廣大なるは驟雨の際簑笠の代用に足る。また毎日何回となく大小の川を越す、橋はない、小さい川は馬上にて越す、足を浸さないやうに馬脊にあぐらをかき、大なる川には渡し舟がある、丸木舟又は和船、人と荷物を積み馬は泳ぐ。適宜な所に驛傳といふて馬繼場がある。日常辨當は梅干入りの握り飯、時には雑語を用意したこともあつた。また缺くべからざるものは紗布の一片である、これは糠蚊、蚊及び蛇を防ぐために顔を覆ふのである。

二十八日、土、晴。鷓川發、同名の川を渡る、渡し守はアイノ、馬は泳がせた。これより海岸を離れ、川に沿つて上る。チンといふところに開墾監督所があつて、この邊の開墾を大に奨励してゐる。アイノは段々漁獵の生業を失ふのを保護するのである。鷓川流域にアイノ小屋三百戸許があると。前別のカチャシノはアイノ中

の富家でオテナ(酋長)である、小熊を畜ふ寶物が澤山ある、ここで握り飯を食ふ。川を度々あちらこちら渡りながら上る、河原にて落馬、生別より原始林いよ／＼深く、道ます／＼幽かになる、特にアイノ案内者を雇ふ。送上ベシリウク(略して普通ベシリと呼ばれてゐる)迎ひに出てゐた。平取着、同人の小屋に泊る。札幌この方入浴せず、汗を流すべく沙流川に入る、餘り冷いで直に飛上つた。

二十九日、日、晴。ベシリは沙流川流域のアイノ酋長で役人のいふことをよく了解し、忠誠に職を盡し膽力もあり、五十六歳の大男である。アイノに對しては大に權力を有つてゐるから、十數里に互つて散在してゐるのを呼び集めてくれたから、調査に甚だ都合であつた、十人許計測した。平取はアイノの都ともいはれて重要な地である。ユウカラ(詞曲)に歌はれる英雄オキクルミはアイノにマレツプ(捕魚器)、アイツボ、熊、鹿等を捕

る弓仕掛け、その他總て漁獵耕作の法を教へたカモイであるが、この神はハユビラといふ山へ天降つたと。この山は十丁許川上にあつて、これに登れば沙流川が眼下を流れ誠に眺のよいところである。それでこのオキクルミは義經であるとか、義經はオキクルミの婿となつて秘藏の奇術の書いてある巻物を奪つて逃げたとか、アイノを征服したとか、種々な譚がある。ハユビラの頂上に義經の社があつたが、嵐で破れ今はその跡のみである。神體義經の像はベシリのところの棚の上に保管してあつた。これを見るに一尺未満の木製甲冑彩色武者人形、背面に寛政十一年近藤重藏等の文字がある、ベシリは、アイノのためにはあまり有り難い神様ではないといひながら再び棚へ載せて拜んだ。

大正十四年夏この地へ行つて見た、輕便鐵道があり、三十八年前の様は想像も出来ないやうに變つてゐた。村の北端、百段もある高い所に立派な義經の社が出

來て、前述の像が神體として納まつてゐる。境内に村の事に盡力したアイノ傑物ベシリウクの記念標が立つてゐる。たゞ沙流川の清流だけは昔のままのやうであつた。

チャリサンゲのことを言つてアイノの刑罰のことを尋ねたらば、ベシリは彼奴どうしたかと思つて居たが札幌にゐるかへといふて驚いてゐた、彼は佐瑠太のもので、姦通ばかりでなく、二人共人の物を盗んだり、嘘をついたり、餘り悪い奴等だから鼻を削いでやつたと(この刑をエトラスケといふ、エト鼻、ラスケ削ぐ、切る、耳を切る罰もある)。今後かゝる私刑は有り得べからざることなればチャリサンゲ夫婦が最後のものかと思はれる。

三十日、月、晴。十餘名計測。東京から偉いクシユリカツトノ(醫者)が來たといふ觸れ込みだから、昨日も今日も病人六、七名來た。豫め用意して置いた藥

を遺つた。中に一圓札二枚出したものがあつた、これは入らぬといふて返したらば非常に有り難がつて去つた。夕刻になつてベソリが荷菜(一里許川下)に急病人があるから見てくれといふ、馬に乗つて出かけた、ベソリは先にたつて走つて行く、途中大男のベソリがアツと叫んで顔色を變へて立ち止つた、何事かと思れば二尺許の蛇が道を横切つたのであつた。アイノが蛇を忌嫌ふことはこの人種特性ともいふべきで、殊にメノコは非常である。女子に一種の精神病が澤山ある、その發作は蛇を見るとか又はその談をしても起ると。斯様な婆をトツコニバツコ(トツコニ蛇)といふ。病家に到れば病人(當家の主人四十歳位)は横臥して梁から繩(荷を背負ふに用ふるもの)を下げて、これにつかまり、ハンヤア、ハンヤアといふて、腹痛に苦しんでゐる、側に親類のものらしい六名の男女がゐる。急性腸カタルであるから阿片丸を與へた。

三十一日、火、曇。平取出發。昨日の病人の前を通るから寄つて見たらば大に樂になつたといふて喜であつた。佐瑠太(これまで四里)を経て沙流門別着。病院長石野信氏を訪問、三名計測。日の暮れるを待ち、石野氏先導、病院に雇はれてゐる十五、六歳のアイノのセカチ(若者)を連れて發掘に出かける、十丁餘隔つる山林中の墓に達す、燈なし、但しマツチはあるが、全く手さぐりにて當らず、北海道名物の糠蚊群がり、呼吸することも出来ないやうな情態にて、如何とも爲し難く中止した。

かと思へば、しないではゐられない。この病をイムといふ。夜に入り石野氏遂に目的を達したりとてセカチ骨を持ち来る、厚く勞つた、若者は暗夜五里許ある道を馬で走つて歸つて行つた、可憐。二日、木、晴。朝オテナ、イタクノアの頼により腹膜炎患者診察。高江發。新冠御料牧場見學、宏大、馬匹牡三四一、牝六八五、各種馬十數頭。アイノ小屋に休憩、この邊開墾大に進む。下下方(染退川口)着、病院長渡邊柳氏訪問。北海道に鱈は至て少ないが當地は名物なりと、これを味ふ。

八月一日、水、雨晴。門別發、賀張、厚別を経て高江着。二名計測。丁度トノントクといふ老婆通りかかり呼び止めた。これは著しいトツコニバツコである、人々からかつて遂に發作起る、總て言語動作を眞似る(反對のことをするものもある)、その様甚だ奇、鎮靜の後自分のしたことは皆覺えてゐると、然らば何故する

三日、金、晴。渡邊氏の案内にて午前一箇所發掘。午後は乘馬にて上下方目名方面(二里許)へ墓捜しに出かけて數箇所見附けた。一箇所だけ掘つて、暗くなつて宿へ歸つた。

四日、土、晴。夜の明けぬ中といふので三時に出かけて、近きところのもの一箇掘つた、朝露にびつしより濡れて困

つた、早速火をおこして乾かした。朝食。入夫三人連れて昨日の目名へ出かけた、七箇發掘。この邊アイノ小屋散在するも、丁度昆布採りの季節にして大抵は出稼、留守中であつたから都合が好かつた、日暮れて宿に歸る。收穫十體の荷造り、石油箱六箇となつた、十二時過ぎた、今日は随分疲れた。

五日、日、晴。下下方出發。靜内門別、春立、姨布を経て浦河着。道は海岸砂場、昆布の季節にして、その採集盛んで、砂上一面に乾してある、馬その上を走る、時々すべつた。病院長樋口泰東氏を訪ふ。六日、月、晴。樋口氏より頭骨一箇得た。浦河發。類似齋。病院長弘田岩雄氏來訪。四名計測。

七日、火、雨曇。弘田氏案内にて馬を命(ニ七(一里餘))の山中に入り墓を探す、四箇を得た、また戸長舟橋八郎氏頭骨一箇贈與せらる。昨日のものと合せて六箇、石油箱二箇に詰める。アイノ病人

二名(大人小兒)診察。類似出發、海岸岩多し、馬上甚だ危険なり、二回川を越す、天氣惡し、日暮れる、誓内着、旅人宿なし、海産物を取り扱ふ家に頼みて泊る、甚冷、火を起させ、單衣を重ねて着る。

八日、水、曇晴。誓内發、昨日様似より雇つて來た馬夜中逃げて居ない、已むを得ず二里餘の道を歩いた、幌泉着。病院長内野秀三郎氏來訪、頭骨二個贈與せらる、氏の依頼によりアイノ女病人二名診察。

九日、木、晴。幌泉發、庶野着、驛傳一軒あるのみ、晝になる、握り飯なし、昨日アイノ患者が呉れたビスケット少しあり、これを以て晝食に代ふ。これより愈發留山道となる。夕刻猿留着、東海岸第一の難所としてある山道も案外樂に越した。ただ終日名物の蛇に攻められた、道の別段惡くもないところで落馬した、これは全く馬が蛇に堪へずして跳ねたた

めであつた。十日、金、晴。猿留發、茂寄着。病院長眞下喜久治氏來、珍らしき炎熱(三十一度)。午後原始林中に墓を探す、五箇所見附けて一々これに覺え印を附し置いた。夕食後入夫二人雇ひ發掘に出かけた、暗中ながら星明かりとマツチを利用して、五箇共丁寧に取り擧げた、糠蚊は苦しかつた。歸途一人夫がアツ人魂だと大聲をあげて叫んだ、ナアンダ大きな流星だといふて大笑した、十一時過ぎて歸つた。

十一日、土、曇。この日は別な方面へ出かけて十箇所見附けて掘つた、又開墾の際出た骨を改葬してあるといふ寺へ行き、和尚の了解を得て掘つた、頭骨四箇を得た。昨日のものとして十九箇となつた。荷造りのため病院へ行き晩食の饗應を受けた、三平汁といふものがある、これは鹽鮭、鰾、馬鈴薯(五升芋といふ)を合せ煮たものであつて、この味を會得せぬものは北海道に住ふことは出来ない

といふ特種のものである。食後石油箱八箇に詰めた。この意外なる大收穫の喜は非常であつた、眞下氏に深く感謝した。

十二日、日、深霧。茂寄出發、ピロフネにて携へたる辨當餅を食ふ。涌洞を経て大津着。晩病院長田中徹三氏來訪。

十三日、月、晴。アイノ刳舟に乗つて大津川を上る、長四間、幅二尺許、大木幹を刳りたるもの、漕ぎ手はアイノ三人、十勝平野は開墾大に獎勵せられ多くの畑、水田を見る、六里許上りて豊頃にて舟を止め陸に上りて舟子等携へたる米を炊く、その法舟槽ぎ用の棒三本組みて鍋を吊るす。午後九時十弗着、大津より十一里許、河岸にアイノ二名焚火してゐる、これはここに野宿するのである。アイノ小屋四戸ある、シイクアイノの小屋に宿す、鱒を買ひ米を炊かせて晩食した。蚊、蚤非常に多い、用意の袋に入つて寝た。これは金巾にて製し全身を容れる大きさにして、頸にて巾着のやうに締めるのである、

蚊帳と共に旅行要品の一である。

十四日、火、曇。このアイノ等は寶物、器物甚だ豊富である、澤山買ひ求めた。十弗發、止若(大津より十六里)着、當所のオテナなるレガンナ陣羽織を着て河岸へ迎ひに出てゐた。アイノ小屋十戸許ある。午後五名計測。

十五日、水、晴。ヤムワツカ發、これより馬。ボンサツナイを経て伏古(大津より二十一里)着。農業世話掛り宮崎氏方に頼みて宿す。この邊アイノ小屋澤山(ボンサツナイ五戸、音更三十戸、伏古三十四戸)ある。八名計測。アイノは大抵日本語に差支ない、彼等相互に日本語を以て話してゐるのを屢見た、併し邊鄙で和人にあまり接しないところにはよく解らないのがある、老爺婆又女には往々ある、この邊にては多數見受けた。

十六日、木、晴。丸木舟にて伏古出發、少し廻り道なるも再び止若へ寄つて頼み置きたる器物を買ふ、途中日暮れる、併

し月朗か、甚だ快、十時大津歸着。

十七日、金、晴。田中徹三氏の東道を以て墓の所在探索に出かけた。二箇所見附けたるも中は空。午後は町の北方二十丁許の字ウツナイといふところにて五箇發掘した、中四箇は明治七年四月本船へ荷物積み込みの際解頭覆して溺死せしもの、倔強の男である、一箇はこれより古きもの、日暮れて九時頃宿に歸る。晩食後病院へ行きて荷送り、石油箱六箇となる、十二時過ぎて眠に就く。

十八日、土、晴霧。大津出發。尺別にて辨當を使ふ、驛傳一戸あるのみ。白糠着、驛傳に泊る。當村にアイノ小屋七十餘戸ある、土人は舊風にして特に不潔なりと、晩食後戸長伊勢田氏の斡旋にて五名計測。

十九日、日、霧晴。アイノ患者三名診察。白糠出發、伊勢田氏庶路まで見送り呉れた。大藥毛畫、ここは馬繼立所一軒あるのみ。旅程中方々で堅穴を澤山見たが、この邊には殊に多い、數百箇群をな

してある。釧路着。病院長有馬元函氏を訪問、この地近年までアイノ小屋ありたるも、ハルトロといふところへ移住して今はない。古墓はあるべしといひて吉田某なる人を紹介せらる。

二十日、月、晴。早朝吉田某の案内にて人夫を連れて町の裏山を探すも空し。午後は新らしきに過る嫌ある三、四、五年前のものを掘ることに決した。人夫四名を雇ふてそこに到る、雜木林中に四箇ある、長方形にして土を五、六寸高く盛る、頭端に墓標立つ、徑三、四寸の、高さ三尺位の丸太にして、その上端に幅二寸、長一尺五寸位の板を釘にて横に打ち付けて、その兩端に穴を穿つてある、男女の區別はない、ただその穴に布片がさげてあつて、その白のは男、赤いのは女である。若しアイノが通りかかることあつてはとて見張りを置いて發掘にとりかかつた、なか／＼深い、四尺程掘つて漸く達す、斯く深く埋ること、上に大小

の木枝を渡してないことは他の墓と趣を異にしてゐる、屍は衣服を着せてキナに包むである、皮膚、毛髮、髀、靱帶、腦髓の如きはまだ多少残存してゐる。このままにては扱ひ悪いからして谷間の細流に持ち行き自分も仲間になつて洗つた、四方山の雜談中に一人夫が頭骨から腦髓を掻き出しながらいふに、これを食べふのだが、なか／＼咽を通らないなア。餅につけて食ふんだが嚼んでるとだん／＼膨れる様な氣がするなア。自分は無關心に旨くもなからうに何のために食ふんだと問へば、且那脳味噌はかきの妙薬でさア、北海道の様な醫者の不自由なところは盛んに食つたもんでさア。私はこれだツと思はずハタと膝を打つた。これまでに獲たアイノ頭骨中に大後頭孔を切り擴げたのが多數ある、これは和人が腦髓

は徹毒の特効薬であるといふ迷信からして、それを採るために行なつたものであらうといふ説を以つてゐる、そのヒント

は全くここに得たのである。吉田某方へ持ち運ぶ、別に有馬氏より頭骨三箇得る、荷送り石油箱三箇となつた。晩有馬氏の請により患者三名(これは和人)診察した、十一時宿に歸る。

二十一日、火、晴。午前二時半起床、小蒸汽船に乗り込み釧路川を上る。これは安田硫黄山經營のお蔭である、ワツコロベツ着、これまで十二里、事務所一軒あるのみ、塘路村まで僅か五、六丁なりと、ここにて和船引き舟に乗り替へ、人夫三人にて引き、尙ほ上る、兩岸平地、森林といふ程ではなく川柳が繁つてゐる、硫黄を積んで下る舟七、八艘に逢つた。日暮に標茶着、釧路より十八里。ここに集治監がある、これと硫黄山のために二、三年この方開けたところ、人家七十戸許、アイノ小屋はない。

二十二日、水、曇小雨。硫黄精鍊所見學、大規模、一日の精製格六百乃至七百石、従業人夫は標茶に百五十人、山元に

四百五十人なりと。この間二十四マイルの輕便鐵道がある。これに便乘してニタトロマツ下車、これより徒歩二十丁餘にして弟子屈に達す、釧路より二十六里、ここに温泉あり、二階建の宿屋がある。アイノ小屋は五、六丁隔つて七戸ある。六名計測。晩アイノ十名許集めて談話會を催し種々な話を聞いた。

二十三日、木、晴。馬を命じクツチャロに向つて發す、四里の間天空の見えないやうな薄暗い原始林の中を行く、太い枯れた木の幹が方々に横たはつてゐる、馬が過つてこれに躓つき落馬した。途中コタンケシといふところにアイノ小屋二箇ある。クツチャロ部落は釧路より三十里の奥、同名の湖畔、釧路川流出口にあつて、戸數十三、弟子屈部落と共に甚だ貧しい若くは原始的のやうに感じた。オテナなるオトチ方に入りて辨當を使つた、鷹の肉だといふて食はせた、僻地に於ては意外の御馳走であつた。四名計測。日

暮に弟子屈へ歸つた。

昭和九年十月國立阿寒公園觀光のためこの地へ旅行した。四十七年前の面影は跡形もないやうだ、今は弟子屈、クツチャロその他到るところに温泉が湧くから宏壯な旅館があり、自動車縦横に走らせて自由に勝景を味ふことが出来る、全く隔世の感に堪へない。湖畔のアイノコタンにカムイマ(カムイ熊の意、マ焼く)を訪れた。七十歳の立派なアイノで、十數年前に弟子屈から移住したといふ。歸京の後調べて見たらば、四十七年前に弟子屈で計測したもので、その當時は二十四歳の壯年であつたが、今は目が殆んど見えないさうだ、實に今昔の感に打たれた。

アイノ又はアイヌ。何れが正しいかといふに、勿論問題は彼等の發音を我々が如何に感受するかに外ならぬ。私は何れのアイノに關しても、幾度聞いても、ノでもヌでもなく、恰もその中間のやうに感じ

た、尤も今の白老アイノなどは明かにヌといふやうである、併しこれは近代教育の影響が全くないとはいはれない。このカムイマに聞くにやはり中間のやうである。私はただ昔からの慣用を改める程の根據が充分でないと思つてそれを踏襲してゐるのである。

二十四日、金、雨曇。弟子屈出發、ニタトロマツより汽車にて硫黄山見學、主事柳田教誠氏の懇切なる案内にて晝食の前山を一巡した。山は草木なく黄色にして全山皆硫黄かと怪しまれた、測量によれば三百萬石あると。山元より汽車にて夕刻再び標茶着。

二十五日、土、晴。四時起床、下り舟に乗り込み午後五時釧路歸着。郡長宮本千萬樹氏より頭骨一箇贈與せらる。二十六日、日、雨晴、釧路出發、道は大抵山にて、雨後馬頻りにすべる。仙鳳趾着、驛傳に宿す。アイノ小屋十戸許ある、二名計測。

二十七日、月、晴。仙鳳趾發。厚岸沼口を渡る、時に風強く大に水を浴びた。厚岸着。郡長畑一岳氏の斡旋により四名計測。病院長馬場無事郎氏より頭骨一箇贈らる。

二十八日、火、曇晴。厚岸出發、瑠璃瀨(アイノはルイランといふ)にて馬を繼ぎ晝食。道は山を上下してトド松、エゾ松の林あり、風景佳。霧多布着。

二十九日、水、曇。この邊にアイノは居ない、併し毎年漁期に出稼ぎするから、その墓がある筈だといふので馬にて出かけた、一箇見附けた、釧路のもの様な墓標が立つてゐる、掘つたけれども甚だ不完全なものである。これを以てこの探検旅行の最後の獲物として霧多布出發、十五、六里の道馬を走らせ、初田牛、落石を経て日暮れて根室に着いた。便船は今夜出帆するといふので匆々乗り込んだ。三十日、三十一日濃霧のため航海甚だ不便であつた。

九月一日夕刻漸く函館に着いた。二日アイノ頭骨の賣りものがあるとして見れば絹の打紐のかかつた立派な桐の箱に入れ

てある、價は二十圓、法外な直段だと思つて躊躇したが到頭買つた。三日晚函館出帆。萩の濱、鹽籠を経て、六日上野驛着。

◇ 海外人類學界雜報 ◇

先住民族印度輿地に發見さる

世界最古の人物

最近英國考古學者ビドルフ氏とライトナー氏の二人が、アジア大陸縱斷探検を行つた結果、まだ何人にも知られてゐない古代語を話してゐる地方を發見した。其はカシミルの西北端に當るフンツアとナガルと云ふ地方で鳥も通はぬ位の山間僻地である。山窩のやうな住民が一萬二千餘あるが、この土人の言葉は全く獨特のもので、文字などあらず。管がなく、先祖代々口述に依つて覺えて來たもので、彼等ののこしてゐる言葉は現代語の起源と云はれてゐるインド・ゲルマン語でも蒙古語でもセミ語でもないので頗る問題になつてゐる。

英國の若き人類學者 S・B・リーケイ氏が、このほど、東アフリカを探検してロンドンに歸つて來た。そのリポートを彼地の科學雜誌ネーチュア誌に發表したのだが、それによると世界最古の人類のものだと考へられる一つの頭骨を持ち歸つて來てゐる。これに就いて多數の博士達がいろいろ鑑定に努めたが、やはり猿から人間となつた當時、つまり眞實の人間の最古のものであらうと斷定されるに至つた。之は今から百萬年以前のものであり、學界に貢獻する貴重なる資料の發見である、斯界において大評判になつてゐるさうだ。

アイノの人類學的調査の思ひ出……………小金井良精 (54)

雜誌叢欄…………… (73)

學界彙報…………… (78)

貝塚から發見せらる哺乳動物に就いて……………直良信夫 (31)

西浦里附近の史前遺蹟……………小野忠明 (37)

神いくさと山のかみ……………中谷治宇二郎 (16)

再び石舞臺を掘る……………禰津正志 (66)

中野區川嶋發見の原史時代堅穴……………奥田直榮 (9)

海外人類學界雜報…………… (65)

古代船舶に對する新説…………… (72)

滿洲國立博物館開館…………… (15)

滿洲國熱河省赤峰發掘團近信…………… (15)  
琵琶湖底から金石併用時代の小銅鐸發見…………… (15)

平郡島に行く……………磯貝勇 (45)

蠟螂舞攷……………永井義憲 (19)

稻作栽培の民俗……………高田竹治 (27)

焼石を轉がし落す話……………尾山梅郎 (16)

播磨に分布せる月の童謠に就いて三……………栗山一夫 (22)

栗山氏の月の童謠を讀みて……………鮎延瑞鳳 (26)

シエバの女王…………… (53)

新刊紹介…………… (77)

西濃のヤマノコに就て……………南方熊楠 (1)



圖版第二十一 石舞臺發掘航空寫眞 圖版第二十二 中野區川嶋の原史時代堅穴  
表紙 ライドローン島に於けるトリス・キヤムンディシュ (F. C. Bowen; The Sea Nuts)